

【展覧会「クロニクル、クロニクル！」の次なる反復に寄せて】

## 世界に「つだけの花」——その「性の根柢と形式の在否」——

藤野 幸彦

はつめい

本稿は、二〇一六年一月二五日～二〇一七年二月一九日にかけて「CCOクリエイティブセンター大阪」にて開催された展覧会『クロニクル、クロニクル！』に触発されて書かれたものである——恐らくは、一般的な意味での美術批評の態をなしてはいないだろうと思う。そもそも、この文を書いている私は「美術」なるものに関わったことが（中学校の「美術」の時間を別にすれば）つい先日までなかった、文字通りの門外漢である。しかしそれでも、語るべきものが私にはあるように思われた。

先におおよその内容を述べておこう。この論考の中で、私は「一つであること」について幾らか自分の考えを述べたいと思っている。同時に、「同じであること」についても論じることになるだろう。もう少し言うなら、「何故に「つ」なのか（何故に「一つ」であると言えることができるのか）、「何故に同じなのか（何故に「同じ」であると言えることができるのか）」ということの根柢。これが本稿のテーマである。私にとって、それは正しく「クロニクル、クロニクル！」を貫く問いであったからだ。そして更に私見を重ねるならば、それは「何かであること」、「あるいは「何かになること」を指す問いでもある。

しかし、もしかするとこれらの事柄は私でない誰かによって——それも私よりも上手く——語られるのかも知れない。あるいはひよっとすると、既に語られているのかも知れない（それはありそうなことだ）。実際、私は以下に自分が記す内容が、取り立てて新しいものとは考えていない——それでも、他ならぬ「クロニクル、クロニクル！」に要請されたものとして本稿は在る。その理由を出来る限り伝えることもまた、この文章に仮託された目的の一つであると風呂敷を広げておこう。

やや前置きが長くなったが、しかしもう一つ。本稿が二〇一七年二月一六日に行われた「トークイベント 黒瀬陽平×長谷川新」において、黒瀬・長谷川の両氏によって語られた内容を下敷きに行っていることを述べておかねばならない。更にも、同月一九日に行われた「クロニクル、クロニクル！」の（一応の）最終イベント「座談会、座談会！」にて、私は幸運にも長谷川新氏本人と幾ばくか対話する機会を得た。それらの場で開示された大変に魅力的かつ情熱的な議論を纏め、応答する試みとして本稿が読まれたならば幸いである。

結論として、私は黒瀬・長谷川両氏の議論に半分ずつ賛成しつつも、しかし望まれるべきは両氏の間ではなくその重ね合わせだと主張するつもりである。恐らくは相当に身勝手な切り口で本稿が論じるであろうことを断りつつ、「容赦を願う次第である」。

## 1. 「Crucifer」

さて、一つ弁解（より適切に言うなら、開き直り）をさせて戴こう。本稿のタイトルは、決して不真面目でも冗談でもない。あまり宜しくない類のジョークに見えるだろうことは承知しているし、本音を言うなら、そうした悪ふざけが生む効果を書いた本人も多少は期待しないでもない。しかし全く真剣に、敢えて大見得を切るなら一種の必然性すら伴ってこのタイトルは選ばれている。無論、そう述べるだけの理由はあるつもりだ。ここからはそれを述べていこう。

恐らくは、この文章を読む人のほぼ全員が——それが何人いるのかはさておき——よくご存知であろう。「世界に一つだけの花」とは、二〇一六年を以て解散した国民的アイドルグループ「SMAP」最大のヒット曲であり、本曲がシングルカットされたCDの売り上げは三〇六・三万枚（二〇一七年二月現在）。これは本国において二一世紀最大の数字であり、文字通り今世紀を代表するであろう一曲である。しかしそれだけに、と云うべきか、この曲はやや恣意的、また時として思想的な解釈を与えられても来た。少し引用してみたい。

「NO.1にならなくてもいい もともと特別な Only one」

（中略）

それなのに僕ら人間は

どうしてこうも比べたがる？

一人一人違うのにその中で

一番になりたがる？

そうさ 僕らは

世界に一つだけの花

一人一人違う種を持つ

その花を咲かせることだけに

一生懸命になればいい

唄い出すと、いわゆるサビとその直前の部分である。NO.1にならなくていい、もともと特別なOnly one——」の歌詞はアメリカ式の競争社会・格差社会を志向した当時の政権に対するアンチテーゼと理解されたこともあったし、一人一人を肯定するこの思想は反戦歌だと語ったニュースキャスターも確かいたと記憶している。勿論(勿論、と私は言う)こういう解釈が提示されれば、他方では反発が起こりもする。努力を否定する姿勢、少なくとも急情を否定しない姿勢に対する賛美ではないか、などという言説もあつたように思う。

歌詞を手掛けた槇原敬之自身は、「一人一人違う種を持つ」と個性の尊重を語りながら、一方で「その花を咲かせることだけに一生懸命になればいい」と努力を否定している訳ではない、と何処かでコメントを寄せていた。重要なのは他人との競争ではなく、自分自身の花を咲かせることができるか否かだ、と述べたかったのだろう。

この歌において謳われたもの——思想と呼ぶのならそれでもいいが、ともかくもそれは望ましいものであったのか否か。失礼ながら、私自身はそんなことには興味がない(正確に述べるなら、それが重要だとは考えない)。とはいえ一点、指摘されるべきことがあるとは思っている——恐らくそれは、極めてナンセンスな疑問であることだろう。何故に、「世界に、一つだけの花」である我々人間は、「一人一人違う種を持つ」のか? 「一つであること」の意味を、ここで私は問うてみたいのである。それも、正に「クロニクル、クロニクル」において示された問題の一つとして。

世界に一つだけの花——この「一つだけ」とは、どういうことだろうか。単純に考えれば(実はそうでもないのかも知れない)、数において一である、単独である、ということだ。大げさで恐縮だが、英語から借りて言えば「シングルsingle」であるということ。ここではシンギュラリティ(singularity【単独性】)が語られているように見える。

一方で「違う種を持つ」ということは、文字通りに捉えるなら「違う種に属する」ということだろう。異なる「種species」に属する——つまり、正にスペシャルspecial「特別」だと言われるほど違うということが謳われていることになる。スペシャルであるということとは、それが一つの種をなすということと同じなのである。

しかしだとするならば、一連の歌詞には一種のカテゴリーミステイクが存することにはならないだろうか。シンギュラリティとスペシャリティ、単独性と特別性は、同じものではないはずである。本当にナンセンスだな——歌詞を取り上げるのに、カテゴリーミステイクも何もない。カタクレンス(catachresis [「濫喩、誤転用」])というレトリックを知らないのか、などとはどうか言わないで欲しい。私はこの指摘を通じて、むしろそのレトリックの機能が何を意味しうるかを問題にしたいのである。

「世界に一つだけの花」は、明らかに「僕ら人間」について歌っている。誇張して言おう——「人間」という種に属するものとしての我々を歌っているのである。その意味で「一つであること」は、敢えて表すならばパーティキュラリティ (particularity [「特殊性」]) として理解されるだろう。この場合、個人と個人の区別はあくまでも「人間の内の一人」としての区別、同じ種の中での区別となる(日常的な語感とは異なるが、しかし特殊である particular ことは本来、部分 part であることと不可分なのである)。その我々が、にも拘わらず特別。即ちスペシャルであるということ。この事態は如何に理解されるべきだろうか。

少し方向を変えてみよう。この歌の英訳詞は、謳われたスペシャリティをよく伝えていると思う。そこで用いられる言葉(訳題にもなっている)は One of a kind —— 一点物である、同じ種類に属するものは二つとない、ということが表れていると言えるだろう。だとするとパーティキュラリティからスペシャリティへの移行(あるいは、これらの意図的な混同)が、やはりレトリックの正体ということになりそうだ。加うるに、シンギュラリティという言葉自体が、既に「単独性」と同時に「特異性」を意味するものでもある——これはあまり見慣れない語であろうが、取り敢えずは「特別性」や「特殊性」という語で我々が日常的に表現しているものと同じ(つまり、スペシャリティ)だと考えてよい。だとすれば、これらシンギュラリティの二つの意味に基づき、我々はパーティキュラリティとスペシャリティを(半ば無自覚に)繋げているとも言えるかも知れない。

ここでは、次のように問いを纏めておくことにしよう。単独性と特異性——二つの異なるシンギュラリティは、常に一致するのだろうか。両者は異なる概念ではあっても、排他的な概念ではない。それこそ One of a kind なら、数において一つのもものが、同時に他のあらゆるものとは別の種を構成することになるだろう。しかし勿論、「二人の人間」と我々が言う時、この二人の人間はそれぞれに単独ではあっても特異ではない。この揺らぎこそ、私の関心事である。

常に、と問うことの意味はこうだ。即ち、我々は本当に「もともと特別な Only one」なの

だろうか？ Only oneである」とと、スペシャルであることは必ずしも一致しない。ならばそのスペシャリティは、あまりにも楽観的に約束されてはいないか？ 「一つであること」の意味が、「こゝでは問われるべきものとして宙吊りになっている。

## 2. 「同じ人間」

先に進む前に、一つ言葉遊びをしよう。私と貴方は、同じ人間である——しかしどういうわけか、私と貴方は違う人間である。どちらの主張も正しいことは違いないが、しかし何がおかしいかもお分かりであろう。私と貴方は種としては「同じ人間」であるが、個人として見れば勿論のこと「違う人間」である。ここには「一つであること」と「同じであること」の対立が典型的に現れていると言えるだろう。

しかし他方、これもまた常に成り立つ対立ではない。私は私と同じである、という限りにおいて、「一つであること」と「同じであること」は一致してしまうからだ。実はここにも、「世界に一つだけの花」に潜んだレトリックがある。私たちは、全く別々の同じ人間だ——そうでなければ、この歌のメッセージは成立しえない。私たちは例外なく特別なのであり、その意味では同じだということがそこでは謳われている。単独性と特殊性が一致する次元において、「一つであること」と「同じであること」は一致する——「一つであること」はこの時、もはや「自身と同じであること」の他に意味を持たないだろう。にも拘らず、正にその一点において我々は「同じ人間」だと謳われているのである。

これが矛盾だ、などと言うつもりはない（実際、きちんと主張のオーダーを分ければ矛盾でも何でもない）。私を取り上げたいと思うのは、先と同じ問いだ。即ち、我々はもともと、例外なく特別なのか？ この問い掛けにイエスと答えることによって——そして、それのみによって——「世界に一つだけの花」が謳い上げたものは成立しよう。

もう一つだけ注意して、先に進むことにしよう。私がここまで提示した構造は、以下のようなものだ。私たちは皆「同じ人間」であり、また同時に「自分自身とのみ同じである」という意味で「一つ」でもある（これは、特殊性と言い換えられる「一つ」である）。一言にすれば、人間としてと同時に個人として、二重に規定された存在であるということだ——加えて、繰り返しになるが強調しておきたい。それがもともとである、という点に私は疑問を投げ掛けたのである。

これで漸く、一応の準備が整った。私はこの問い掛けが「クロニクル、クロニクル！」にとって——あるいはむしろ、そのキュレーターとしての長谷川新氏にとって、本質的なものであったと（勝手に）考えている。そしてこのことは、他でもない黒瀬陽平氏との対話の中で示されたものだ（やはり勝手に）考えているのである。以下、その見通しを述べることにしたい。

「トークイベント 黒瀬陽平×長谷川新」で語られた主題は、一つではない。だが黒瀬氏の次の主張が——あるいは、長谷川氏へと向けられた批判的な要求が——大きなテーマの一つとなっていたことは疑いのないところだろう。即ち、「キュレーターは、自身の展覧会に形式を与えるべきである」。必ずしも黒瀬氏の発言通りではないだろうが——なにぶん、録音が手許にないのでお許し願いたい——要約すればこのように黒瀬氏は語っていた。

ここで「形式」と言われているものが、単なる形状や形態よりも少し意味が広いことには注意が必要である。展示の仕方であるとか、そういう型が問題だったのではない。小難しく言ってしまうと、本質規定を与えるべきだ、と黒瀬氏は言っていたのだと思う。端的には、「この展覧会は〇〇である」というような仕方、他でもなく「クロニクル、クロニクル！」とは何か、という問いに答を与えるもの。その独自性や価値、あるいは意義。そうしたものがそれによって包括的に理解されるような、理念と言い換えてもよいもの。黒瀬氏の指摘は「クロニクル、クロニクル！」におけるその不在——より正確には、キュレーターである長谷川氏自身によるその提示の欠如である。

\* 「座談会、座談会！」において、この「形式」という語について私がやや硬すぎる理解をしているという旨の指摘を戴いた。黒瀬氏本人に確認ができたわけではないが、しかしそれは恐らく一種の「主張」ないし「仮説」として理解されるべきものであり、展覧会はその具体化であるという図式が氏の念頭にはあっただろうということである。「理念」とその具体化、という私の理解とは確かにずれがあるが、本稿の主張には抵触しないものと判断してそのままにした。

自らが何を提示したのか、あるいは、提示しようとしたのか。キュレーターは自らそれを語るべきだ、と黒瀬氏は主張していた（はずである）。誰かがそれを語ってくれる、という態度、批評や評論を待つような態度は望ましくない。ここには、今を代表するキュレーターとしての黒瀬氏の気概と自負が漲っている（と私は感じた）。確かに、そこまで明快な答は「クロニクル、クロニクル！」において提示されていなかったかも知れない。その限りで、黒瀬氏の指摘は極めて真つ当なものだったと思う。

勿論、真つ当である、ということとは必ずしも唯一の正解であることを意味してはいない。事実、長谷川氏はこの指摘に理解を示しはしても、一方で形式の不在を自身の不備と認めることは決してなかった。そして、自身の態度が先に述べたような批評待ち、一種の留保とは異なることを、微妙なニュアンスで——繊細な、と言った方が適切かも知れない——黒瀬氏に伝えようとしていた（と思う）。つまり逆説的に言えば、形式の不在こそ「クロニクル、クロニクル！」において必要欠くべからざる点、形式不在という形式がそこにはあるという長谷川氏の自覚ないし態度が示されていたと言つてよからう。

しかし、形式不在の形式——一見すると空虚な言葉遊びとも思われるこれを、我々は如何にして扱おうのだろうか。もしこれが本当に形式の不在を意味するならば、「クロニクル、クロニクル！」は展覧会としての意義云々以前に、何ものでもなかったことになる（本質を規定するものがない、とはそういうことだ）。恐らく、そんなことはあるまい。そしてそうでない以上は、何ごとかが語られて然るべきではあつただらう。とはいえ、形式不在の形式は、形式として語られるべきものでもない。両者の議論は、やや空転気味とも言える平行線を描いていたように思うが、それも無理からぬことではあろう。それだけ困難な主題が、両キュレーターを挟んで展開されていたのである。

対談に関する評価は、後にもう少し語ることにして先に進もう。次のように考えることはできないだろうか。キュレーターが形式を提示するということは、当の形式が展覧会よりも先にあることを意味する。それも、時間的にはなく論理的にである——何故、展示される作品はこれらでなくてはなかつたのか。何故、この展覧会は云々の仕方で開催されねばならなかつたのか。キュレーターは、その答を語ることで展示の必然性を提示する。そしてその帰結として、この答のために——つまり、形式のために——展覧会は行われた、という主張は避け難いものとなる。既にある形式を目指すものとして、展覧会は（また同時に、そこに集められた作品たちは）その意義と正当性を担保されるのである。

それ故に展覧会は常に、そして既に、確定されたものとしてのみ現れることになる。それはもともと特別なのだ——約束された特別性において展覧会は開催され、キュレーターはその約束の保証人である。私は、そこに何ら非難されるべき点はないと思う。分かつた振りをして言つてしまえば、キュレーターとは正にそうした専門家であらう。しかしそこには、常に同じ疑問が付きまとももいる。その提示されたスペシャリティは、そんなに自明のものであろうか？

氏の名誉のために断っておくが、黒瀬氏自身も、形式とは容易に与えられるものではないことを強く意識して語っていた。再度強調して言うならば、その困難に敢えて立ち向かい、価値を提示してこそキュレーターはキュレーター足りうる。その気概あってこそ、黒瀬氏は形式の提示を自らに課するのである。しかし長谷川氏は、全く異なるアプローチから、同じ問いに答えようとしていたように思われる。こんな風に言えはいいだろうか——形式とは与えられるべきものでなく、獲得されるべきものであると。「クロニクル、クロニクル！」とは正にその獲得に向けられた営み、挑戦であり、それ故に前以て形式が与えられることはできなかったのである。

実際、見事な付置によってこの試みは実行され、そして恐らくは達成された。思い返して欲しい——展覧会は、二度、繰り返された。「二度」、そして「繰り返された」と言う限りに於いて、それは紛れもなく「同じもの」だったはずなのである。にも拘らず、知つての通り「クロニクル、クロニクル！」は必ずしも同じものの単調な回帰ではなかった。このことが決定的な意味を持っていたことに、今や我々は気付くべきではなからうか。

形式とは、それが何であるかを規定するものである。それ故にまた、それが何でないかを決定するものでもある——常に確定された線引きとしてのみ与えられるもの、それが形式なのだと言ってもよからう。「クロニクル、クロニクル！」において達成されたものがあるとするれば、それはこの構図の転倒に他ならない。線引きは未完のまま、開かれたものとして形式は目指されるに至る。

だからこそ「クロニクル、クロニクル！」は常に、新しい何ものかでありうる。未だ確定されざる境界線は、次なる繰り返しにおいて拡張される可能性を内包し続けるだろう。全く異なる別のものが、しかし、同じものとして繰り返すこと。それは、先なる約束により保証された同一性ではない。同じものを——未だそれが何であるかすら知りえないそれを——目指して繰り返された、その事実のみがかるうじて「同じもの」として在ることを許すのである。そして、これだけがスペシャルであること（即ち、「同じである」ことの基準となる種概念）を可能にする。

「同じであること」を、不断に新しく作り直すこと。意味の未確定と形式の未確定、またスペシャリティの未確定は、全て軌を一にする。従つてこの場面において、もともと特別なものなど最早あり得ない——単独性は特異性を回避し続け、我々はその特異性を証立てる試みを続けねばならない。恐らくは、何ものかであるために。またより正確には、何ものかになるために。



従って選択肢は二つである（但し、どちらも綱渡りだ）。先の例を思い出そう——私たちは皆「同じ人間」であり、また同時に「自分自身とのみ同じである」という意味で「一つ」でもある。このように語る時「人間」の特異性は既に与えられており、故に「私」の特異性もまた約束されている。しかし、その約束の保証はあるのだろうか。勝手に代弁することを許されたい。黒瀬氏は、然り、とこの問いに答えるだろう（彼は約束の保証人である）。

対して、長谷川氏ならばどうだろうか。恐らくは、次のように言うのではないか——その約束は、我々自身の手によって履行されるべきものだ。故に、ここでも順序は逆になる。単独でしかない一人一人が、特異であるべく自分自身を繰り返すこと。そうした不断の試みによつてのみ、「人間」の特異性もまた構築されていくのである。「世界に一つだけの花」が本来にあるとすれば、それは、この見果てぬ旅路の果てにあるように思われてならない。

我々は皆、同じ人間ではあるのかも知れない。しかし、何を以て同じであるのかは、なお未明の暗がりにある。「クロニクル、クロニクル！」はそこに篝火を掲げたのだと語ることは、些か性急であろう。それでも、そこに暗がりがあることが示されたことには疑いない。これは、長谷川氏の功績と言ってよいものではないだろうか——少なくとも、もともと特別、何かとは決して自明でないことを、繰り返された展覧会は証立っているのである。

### 3. 「何かがあるから」

我々一人一人が、その単独性の中で特異性を獲得する時。その時においてこそ、「人間」という種もまたその特異性を——つまりは、スペシャリティとしてのシンギュラリティを獲得するだろう。ならば、その時は来るだろうか（蛇足ながら、シンギュラリティとはこうした特別な時点クロニクル||特異点を意味する語でもある）。恐らく、答は否である。もしかしたら、それは年代記と同じなのかも知れない——書き始めることだけが我々には許されている。そして、書き終える日が来ることはないのである。権利上はいつでも誰かがその続きを綴ることができるとし、たとえペンを握る者が絶えたとしても、それは年代記の終わりを意味してはいないのだから。

同様に我々一人一人にも、決して約束されたスペシャリティなどない。ただ、何ものかであろうとすることだけが許されるのみである。長谷川氏自身の主張を、ここで確認することは無駄ではないだろう。曰く、コンテンツポラリアートはその本質においてリベラルである——リベラルであること、それは、既に確定された形式を持たないことに通じている。我々

は常に新しい何か、他の何ものかでありうるのだ。開かれた可能性、これは、正しく自由と  
呼ばれるに相応しいものである。

しかし他方、この自由は決して安住の場所としてはありえないものでもある。即ちそれは、  
私が私であることを何ら保証しない自由なのである。これを「クロニクル、クロニクル！」  
に当て嵌めるなら、次のようになるだろう。そこに集う作家たち、そしてその作品たちに、  
長谷川氏は決して約束された価値を与えない。「クロニクル、クロニクル！」は、  
それ自体が何ものかに至ろうとする一つのプロセスを（それが達成されなくても）具現  
する試みである。その最中において、彼らは全くの自由と共に、自らが他ならぬ自らである  
こと、そこに自身が存在する必然性を証立てることを（やはりそれは達成されなくても）  
要求されている。何と苛烈な要請であることだろう——しかもそれは、同時に「クロニクル、  
クロニクル！」そのもののスペシャリティをも構成するものでなければならないのである。  
自由には責任が伴う——あまりにも使い古された言葉ではあるが、名もなき花から始める  
しか我々にはなく、そして花が咲くことの保証もない。長谷川氏はこのことを独特の仕方  
でもアートにおいて、示そうとしたかにも思われてくる。

自由であることは、その起源において何ものでもなくなることである。故に、何ものかに  
我々はならなくてはならない。つまるところ、私が「クロニクル、クロニクル！」に感じた  
ものとは、これだけのことなのだろう。それは少なくとも、私にとっては「もともと特別な  
Only one」に対する、根底からの問い直しであるように思われた。本稿を書くことを決めた  
のは、きつとそんな理由からである。私もまた、ただ一人の何ものかとして長谷川氏に応答  
せねばならなかったのだ。たとえ、それが不可能であるにしても。

さて、トークイベントのことに戻ろう。ここまで述べてきたことが正しいとしたなら、  
黒瀬氏の長谷川氏に対する批判、展覧会の形式を提示することの要求は、どうも半分ほどの  
的を外していたように思われる。少なくとも、氏の主張に「クロニクル、クロニクル！」が  
形式を前提することそのものに対するアンチテーゼとしての機能が意識されていなかった  
とすれば、この評価は避けられないだろう。

他方で、長谷川氏が形式を提示しなかったこと、このこと自体に対する批判は正当である  
とも私は感じている。先ほどは形式不在の形式、という言葉は私に用いた——これはしかし、  
形式として論じられるべきものではなかったとも。とはいえこれは、なお整理して語られる  
べき事柄ではなかったのだろうか。

考えてみて欲しい。「クロニクル、クロニクル！」が提示したもの、それは形式を前以て約束されるべきものとしてではなく、獲得されるべきものとして目指す構造である。勿論、それは常に新たな可能性に開かれているが故に、達成不可能なものではあるだろう。しかし、次のことも我々は確認したはずである——そこでは「同じであること」が不断に新しく作り直されている。あるものが何ものかであることの規定は、決して固定されたものとして現れはしない。これは同時に、次のことを意味してはいないだろうか。即ち我々は逆説的にも、常に新しく、何かの続きを始めるのである。

我々には、年代記を書き始めることだけが許されている。しかし、その年代記が、いつか、誰かが記したその続きでないことがどうして分かるだろうか。もしも、自らが書き始めたものがそれ以上の意味において新しく、いわば空前のものであったと主張するなら、それは絶後でもあるという主張と——つまりはもう訪れることのない、スペシャルなものであるという主張と——どれほど違うのだろうか。長谷川氏には、自身の展覧会に形式を提示する必要はなかったとしても、それが何ものかの続きであること（そして恐らくは、何かの続きとしてしかありえないこと）は、氏自身の主張のためにも提示されねばならなかったのではあるまいか。

私が黒瀬氏の指摘に賛同する半分はこの部分であり、長谷川氏への賛意が半分に留まることもこのことによる。このように表現しよう——「クロニクル、クロニクル！」には自身に先立つものとして、形式を提示する必要はなかった。それはむしろ、自らの主張故に忌避されるべきものですらある。しかし繰り返される年代記は、正にその繰り返し故にこそ、自身の系譜学を、あるいは自身の考古学を要請するのである。それがなければ、提示された主張はその意義を失ってしまう——長谷川氏自身が引用した言葉を私も借りよう。「一塊の石ころは死んだり消えたりできませんから、かつてあったことにはなれません、ですから今あることもできないのです」。もしかしたら、私はこの言葉の意味を正しく理解していないのかも知れない。だとしても、「かつてあったもの」だけが「今あることができる」ののだとしたら、「クロニクル、クロニクル！」もまた、恐らくは既に在ったものとして示されねばならないのではないか。勿論、形式ではなく、既に繰り返された自己自身としてのそれが、である。今、他ならぬ自身が繰り返されている証として。「クロニクル、クロニクル！」が何ものかであることの証明として。

これは恐らく、形式を与えることを遙かに上回る困難である（無理難題、と言ってもいいのかも知れない）。しかし、私はそれを長谷川氏に求めたいと思う。今、その終わりを迎え、

次なる反復を待ち始めつつある「クロニクル、クロニクル！」は、意欲的かつ野心的、また何より魅力的なものであった。このように言ってよければ、そこに示された「繰り返し」が新たな価値を（あるいは、価値としての形式に変わるものを）鮮やかに描き出した、というその一点において、この展覧会はそれ自身もまたアートであったと言われうるものである。その意味で、私は惜しめない賞賛を長谷川氏に送りたい。心の底からそう思っている。

その成功を踏まえて、しかし、私は次のように本稿を結論づけたいと思う。「クロニクル、クロニクル！」は、長谷川新の作品として見事に自らを繰り返した。だが同じ長谷川新は、この自分自身の作品のキュレーションを、遂に果たすことがなかったのである。これは、当の長谷川氏にとっては不当な評価であるのかも知れない（実際、氏は自身がアーティストであることを否定している）。とはいえ、何処にも紐づけられることのない繰り返しを、我々は果たして繰り返しと呼びうるだろうか。これだけが、私にはどうしても肯ぜぬ澱として胸に残った。それ故に、賞賛と共にこう記さねばならないのである。繰り返しされたものは何か——その来し方と行く末は、決して語らずに済むものではないのだと。

## おわりに

以上が、本稿の全てである。最初にも述べたが、やはり、美術批評としては数えられそうにもないものが書き上がったことを恥じる次第である。とはいえその一方で、書くべきだと感じられたことは概ね記すことができたような気もしている。元より、私に何かを期待する人もいないだろう。自己満足を許されることを願う。

最後に、蛇足とは知りつつも述べておこう。もしも「クロニクル、クロニクル！」が私に理解しえた通りのもの——あるいはそこまで行かずとも、それに近いものであったとしたら、それは繰り返し返されるはずである。それがどれほどの距離においてかは分からないし、あるいは私たちの誰もそこに手が届くことはないとしてもである。

それと同時に、長谷川新なるキュレーター（私は彼がアーティストでもあると思っているし、その理由は本稿でも述べた通りだが）も繰り返し返すはずである。それは同様に遙か遠くの未来においてでもあるかも知れないが、差し当たりは触れることができそうな距離で。私は今からそれが待ち遠しく、期待に湧く胸を抑えることができそうにない（そんな必要もないのだが）。率直な気持ちとしてここに記しておきたい。

「一つであること」、「同じであること」。そして、「何かになること」。恐らくこれらは、

達成されぬものではあり続けるだろう。しかし敢えて名付けるとしたなら、恐らくそれは一種の統一性、ユニティ unity として理解されるものになることと思う。繰り返された全てのシンギュラリティを、同じ何かとして一つに纏め上げるもの。そんな意味である。

我々は、そうしたユニティを持つものとして、一つだけの花でありうるだろうか。そうであればいいと思う。そうなることができればいいと思う。また私はきつと、そんな花として長谷川氏の次の作品を見たいとも願っているのである。何故か、大輪の花であることを確信してやまないからだろう。

さてすると、それは詰まるどころこういふことなのだろうか。

私もまた、彼に魅せられた一人であるに過ぎないのだと。それはこうした文章を閉じるには酷く不格好な仕方ではあるのだろうけれども、やはり、そのように言うしかないのだと語り終えた今は思うのである。

〈了〉

\*本稿は二〇一七年二月一九日に長谷川新氏に向けて個人的に宛てたものを、氏のご厚意により公開する運びとなったものである。またその際に、「座談会、座談会！」を踏まえて加筆修正を行うこととなった。文中に一カ所設けられた註はそうした事情を反映したものである。この場を借りて議論に応じて下さった長谷川氏に謝意を表したい。また本稿の公開にあたって、同月一六日に行われたイベント「藤野幸彦、キャッチボールの相手を探す」の実施にご協力戴いた長谷川氏を始めとする関係者各位、また実際にキャッチボールにお付き合下さった皆様にお礼を申し上げます。いつか、次の一投が何処かで繰り返されることを願う次第である。